

「漢書・王莽伝」による班固の經学思想を考える

黄 弟璽

1、『漢書』王莽伝の分析

1.1 「禅漢」と「篡漢」の論争

紀元前1年、漢哀帝が薨去した。王政君太后は王莽が平帝を補佐するよう命じた。ついに、国家の最高な権力を手に入れた王莽は、古人をならって「禅漢」を始めた。孟祥才の著作『细说王莽』に、王莽は二つの手段で自分の「禅漢」を粉飾した。

◆「虞舜禅堯」をならう

この手段を用いた理由は具体的に三点がある。

第一に、輿論を作ることである。彼は官途についた後、各種の手段を使って昇進していった。王太后による褒美を全部理由をつけて辞退し、あるいは貧乏な親族たちと召使などに贈与した。名利を好まぬイメージが残り、人々は彼の美德を称賛した。支持者たちは何回も王太后の面前で彼のことを虞舜、夏禹、周公と並列して論じた。

第二は、政敵を取り除くことである。彼は最初官途が入った時は、当時高位にいた淳于長を告発して、叔父の王根を代わりに、大司馬にした。哀帝が薨去し、彼は朝廷に戻って、中山王の嗣子に皇位を継がせた。即ち、漢の平帝である。国家の権力を手に入れた王莽は、哀帝が残存勢力の孝成趙皇后と孝哀傅皇后を自殺させた。また、丁氏と傅氏及び彼らを支持していた董賢夫婦を倒した。

第三は、摂政をした後皇位に登った。伝説によれば、堯は舜を継承者と決めた後、舜の摂政をすることに決まった。八年の摂政の後堯が薨去した三年後に「天下が舜に臣服した（天下歸舜¹⁴）」。「莽伝」により、王莽は西暦一年から九年まで漢の平帝を補佐していた。計算すると「摂政八年」である。

◆「周公輔政」をならう

この手段には具体的に三つの方面がある。

第一は、「白雉の瑞」のことである。周公が周成王を補佐していた時は、世

の中で「白雉の瑞」が現れたことがあった。王莽は平帝を補佐したばかりの頃で、彼は「益州令を暗示し、塞外の蛮夷に命じて白い毛の雉を捧げた。王莽は王太后に上書して請願を出し、その雉を宗廟に祭祀することを願った。それで、群臣は王莽の美德が周公と周成王の「白雉の瑞」を招いたと言った。

第二は、「金縢」の話にならう。漢の平帝が十四歳になった時、病気になった。王莽は周公の先例にならって、「璧を冠る、圭を握る、自分は平帝に代わって死にたかった。」しかし、平帝が最後に薨去したため、王莽はまた新たな皇帝を扶助し、摂皇帝になった。

第三、周公の「居攝踐祚」を利用した。王莽は周公と同様な方法で、わずか二歳の皇子を選び、自分は周公「居攝踐祚」の故事をならって、実質的な「漢帝」となった。

「莽伝」を振り返ると、班固は王莽が庶民から「摂皇帝」になる前半生を記述する中で、儒家思想で「聖賢」と見られている虞舜及び周公旦を王莽と同じ立場で比較することが多い。また、班固の観点から見ると、天子になるのは「孝悌」を中心とする「仁」を持っている以外に、「天意」に合うかどうかの方がより重要な要素であった。「莽伝」の記述から見ると、王莽は確かに他より美しい道徳がある。班固はそれは王莽が名利のために、実は美徳がない自分を粉飾することにすぎなかったと批判したが、そうであるとは考えられない。王莽はまだ庶民の時は無論、国家の最高な権力を握った時も自分の母親に対して心を尽くした。非常に貧乏な人々及び賢能がある人材にも、いつも自分の地位を下げて礼儀正しく接した。したがって、王莽は自分の美徳を正しい場面で表現したにすぎなかったと推測される。即ち、権勢を弄する手段にたけていた。「禅漢」であろうと、「篡漢」であろうと、班固の観点から見ると、実のところ区別がなかった。王莽の失敗は「天時、非人力之致」というのは大事ではないかと考えていたことにより、班固は王莽の事跡から、「禅讓」は実は権力を求める人たちの華やかなベールであるとした。

1.2 「讖緯符命」の利用

「莽伝」に記載された今文経学の利用は主に「讖緯符命」の利用であった。

「讖緯符命」は前漢末期から社会に流行し始め、王莽時代と後漢前期を通して盛行した。今古経学の区別に関わらず、両者とも「讖緯符命」と関係している¹⁶。董仲舒の「天人感応」の思想から深く影響された班固は、『漢書』五行誌において前漢時代の「瑞祥」や「災異」などの事例と関連させた。このような活動と経学思想は両漢時代の統治者が自分の皇位を保つ重要な手段であった。

経学思想に影響された班固は、「讖緯符命」を確信しているが、「莽伝」の王莽の「讖緯符命」に対して批判をしたことには矛盾がある。彼の観点から見ると、王莽は常に「讖緯符命」を「禪漢」の活動と関わらせる。儒家思想を理解していた王莽は、その時流行っていた「讖緯符命」を利用することは理にかなうことだと考えていた。彼の記載によると、王莽が「讖緯符命」を利用し、実行したのは主に二つの時期である。一つは即位する前で「讖緯符命」を利用して、権力を求める時期であった。もう一つは滅亡前の時期に「讖緯符命」を用いて自分を「慰める」時期であった。

前者の例を挙げると、王莽は即位した後、「遣五威將王奇等十二人班符命四十二篇於天下。德祥五事，符命二十五，福應十二，凡四十二篇。其德祥言文、宣之世黃龍見於成紀、新都，高祖考王伯墓門梓柱生枝葉之屬。符命言井石、金匱之屬。福應言雌雞化為雄之屬。其文爾雅依託，皆為作說，大歸言莽當代漢有天下云。總而說之曰：「帝王受命，必有德祥之符瑞，協成五命，申以福應，然後能立巍巍之功，傳于子孫，永享無窮之祚…（五威將王奇とその率する十二人が、天下に「符命四十二篇」を布告した。これは、德祥五篇、符命二十五篇と福音十二篇から構成された。『德祥』は漢文帝、漢宣帝の時期に成紀県と新都県に黄龍が現れたこと、王莽伯父の墓の門に木が新芽を出したことなど記載していた。『符命』は武功県の井石と高帝廟の金匱などのことを記載していた。『福音』は雌鶏が雄鶏に変わる話などを記載していた。これら文章の形式は経文に近いもので、古義に基づいて考え出された解説である。そして、すべての文章の概要は王莽が劉氏に代わって天子の位につくべきことであった。具体的には、帝王が天命を受け、自分に美德あれば瑞祥は必ず現れる。『福氣』を加

えて、代々受け継げる偉大な功業を実現できる。)」また、その「符命四十二篇」は「新朝の国運は漢の九代、およそ二百十年に渡った。漢平帝末期『丹書白石』が現れ、劉氏の終焉が来た、新朝の時代が始まった。」ことも記載していた（新室之興也，徳祥發於漢三七九世之後。肇命於新都，受瑞於黃支，開王於武功，定命於子同，成命於巴宕，申福於十二應，天所以保祐新室者深矣，固矣！武功丹石出於漢氏平帝末年，火徳銷盡，土徳當代，皇天眷然，去漢與新，以丹石始命於皇帝）。五將王たちは全国を回りながら、「皆即授新室印綬，因收故漢印綬（新朝の印を各地に渡し、漢の印を回収した。）」これより新朝の統治を固めるつもりであった。

後者の例を挙げると、王莽は統治が脅かされた時も、また「讖緯符命」を利用して自分を含めた人々を騙そうとした。彼は全国に盗賊が数多く現れた状況を見て、六年一回で年号を変えることを決めた。その理由は「易経」に「日新之謂盛徳，生生之謂易。（日々の交替は優秀な道徳であり、変化の過程による形成した新たなものは『易』である。これこそ幸せであろう。）」ということがあるためであった。「欲以誑燿百姓，銷解盜賊。眾皆笑之（これを以て盗賊の数を減らさせ、庶民を欺きたかった。人々は彼の考え方を嘲笑した。）」

また、民間災害が多発し、盗賊が多いのは、王莽がまだ先祖の宗廟を建てていないためだと思っていた。自分が子孫万代の基業を建てることができると証明したかったため、風水が良いところに華やかな宗廟を建てた。その後、新朝軍隊は昆陽で漢軍に倒され、漢軍は長安城に進軍していた。このような状況に面して、「符侯崔發が「周礼」と「春秋左氏」を引用し、「国は大災がある時、号泣でそれを対する。」という対策を進言した。このような荒唐なことに対して、王莽はこれを深く信じた。彼は群臣を率いて、南方の郊外で号泣した。それだけではなく、感情をこめて泣いている庶民たちには、食物を与えた。また、泣きながら王莽の策文を詠える人々を郎官に封じた。（崔發言：「周禮及春秋左氏，國有大災，則哭以厭之。故易稱『先號咷而後笑』。宜呼嗟告天以求救。」莽自知敗，乃率群臣至南郊，陳其符命本末，仰天曰：「皇天既命授臣莽，何不殄滅眾賊？即令臣莽非是，願下雷霆誅臣莽！」因搏心大哭，氣盡，伏而叩頭。又作告天策，自陳功勞，千餘言。諸生小民會旦夕哭，為設飧粥，甚悲哀及能誦策

文者除以為郎…）」

前者であろうと、後者であろうと、班固は辛口の風刺で王莽の荒唐さを批判した。彼は王莽が「讖緯符命」を提唱していたのは、誠実な信仰があるわけではなく、権力を奪う手段にすぎなかったとしている。「讖緯符命」が自分の「禪漢」に有利な時は、彼はそれを提唱していた。例えば、彼が即位する前に、哀章という人が富と地位を望んでいたため、符命を偽造して、王莽に「禪漢」を唆した。王莽は即位した後には、彼も一足飛びに高官となった。逆に、野望を持っている朝廷官員は「讖緯符命」を利用して、自分を脅迫することもあった。例えば、王莽の腹心である大臣甄丰の息子甄尋はかつて王莽のことをまねて、「作符命，言新室當分陝，立二伯，以豐為右伯（符命を作って、新皇室は陝より東西をわけて二伯を立てるべきであり、豊を右伯とする）」という符命を作った。仕方がなく、王莽はそれに従った。さらに、「尋復作符命，言故漢氏平帝后黃皇室主為尋之妻。莽以詐立，心疑大臣怨謗，欲震威以懼下…（尋はまた符命を作って、『もとの漢氏の平帝の後黄皇室主を尋の妻とせよ』と記した。莽は偽りをもって立ったゆえ、心中もしその通りにすれば大臣たちに怨み謗られるのではないかと疑い、むしろ威力を震って下を懼れさせようと思った…）」したがって、それ以降王莽は符命を審査する官職を設けていた。すべての符命の使用権と解釈権は王室が握ることとなった。班固は「讖緯符命」についての記録を通して、新朝の符命活動の状況を詳しく記載した。これにより前漢末期から後漢前期まで經学思想がどのように国家の政治に影響したのが判明した。

1.3 「托古改制」の失敗

周予同の「王莽改制與經學史中的今古學問題」によれば、王莽の「托古改制」は四つの特徴があると推測されている。

第一は、王莽は古文經学を提唱していた儒家学者であったということである。『周礼』を重視していた。彼は「周礼」に記載された古代井田制を模倣して、建国した第一年（西暦9年）から、全国の民田は「王田」と呼ばれ、私的の売買が禁止された。そして、男性が八名に満たない人家は、田地が一井（いちせい、およそ九百畝である）を超えたら、余った田地は九族や、隣近所、同じ地

域の人たちに分けることとされた。昔から田地がなかった人々には、規定によって夫婦二人で百畝の土地を分け与えた。また、彼は奴隷を「私属」と改称し、売買も禁止した。これは『周礼』地官・小司徒を手本として制定したものと考えられた。

第二は、王莽は『周礼』を引用したが、すべてのことが当てはまるわけではなかったということである。『周礼』は王莽時代以前のものであったため、王莽は自分の改革に役立つことにしか引用しなかった。さらには、別の儒家經典にあり、『周礼』にないことも、役立つことであれば彼は全部引用した。

第三は、『周礼』以外に、王莽はほかの古文経伝も提唱しているということである。

第四に、王莽は古文経学者であるが、今文経学に対して彼は絶対的に排斥したわけではなかった。

以上の点からで、王莽は今古経学の区別を問わずに利用しており、彼にとって経学は政治運営と権力を争う手段にすぎなかった。彼は土地問題や奴隷問題など社会問題を解決したかったため、政治上各方の勢力を自分の側に籠絡したために「托古改制」の理念を提唱したと考えられる。

2、班固の「天」と「時」思想

2.1 班固の「天」と「時」思想の形成

秦漢時代において、国家が統一された一方、思想界も互いに調和して統一する必要がある。前漢初期統治者は秦の滅亡を教訓として、「黄老之道」を採用して階級矛盾を緩和したが、君主の権力が弱かった。前漢の景帝時期に発生した「七王之乱」が漢の統治を動揺させた。それ以降、漢王朝の中央政権の権力を強化するために、武帝の時代に董仲舒の「罷黜百家、獨尊儒術」（儒家思想以外の百家の思想を排除すること）が国家の主流思想に採用された。董仲舒を代表とする前漢時代の思想家がすべて「左右採獲、調和折中」（各家の思想を調和する）「專據古經典」（古代の經典を引用して自分の説を立てる）の風気に従ったため、両漢時代の思想界は「百家争鳴」の春秋戦国時代と違って、衰退の一途をたどっていった。このような学術風気にある班固もその影響から離れ

られなかった。彼の「天」と「時」の思想は儒家思想の神学化と「時命論」の思想と関わっている。以下で両者を簡単に論じたいと思う。

2.1.1 「天人感応」思想

「天」と「人」の関係は董仲舒思想の中で最も重要な要素である。董仲舒の観点から見ると、「天」は人格と意志がある帝王である。また、「人」といえば「天」の意志を代表して統治の役を行っている人、いわゆる国家の統治者のことを指す。両者の関係には二つの内容がある。

◆「天人同類」

董仲舒はこの点について三つの方面から論じた。

第一、人間を含めて世間万物はすべて「天」の創造物であるので、「天」と類似する物であるはずである。

第二、生理的な面から見れば、「天」と人間の生理的な構造が類似しているところが多い。

第三、人の感情と道徳の面から見ると、人の体は天の法則から変化されたものである。人の元気は天の意思から変化された仁である。人の徳行は天の規則から変化された義である。人の感情と本性は天に決められたものである。

◆「同類相感」

董仲舒の観点から見ると、同類のものが互いに感応することができる。これらの現象が現れた原因について、董仲舒は「類之相應而起。」「物故以類相召」と解釈した。さらに、彼は「美事召美類，悪事召悪類」（良いことはまた良いことを起こす。悪いことはまた悪いことを起こす。）「帝王之將同也，其美祥亦先見；其將亡也，妖孽亦先見。」（帝王が現れる時は必ず祥瑞の徴候も現れる。帝王が薨去する直前に、化物と災難が現れる。）ということ推測した。

「天」と「人」の関係が明白になった後、董仲舒は「天人感応」理論を政治倫理の解釈に用いた。これも二つの方面がある²⁷。

第一、孔子の君臣関係、父子関係と陰陽の道を融合して、「王道之三綱」を打ち出した。

第二、君主と「天」の関係を釈明した。国家は失敗の道に入る最初の時に、上天は災害を起こして君主に警告する。君主が自分の間違いを認識できない場合は、怪異の物事で君主を驚かせる。またそれらを見做して間違いをやり続けるなら、国を滅亡させるという結論を出した。

2.1.2 「時命論」思想

本章は班固と同時代の王充を例として、「時命論」から班固に与えた影響を論じたいと思う。

王充は矛先を董仲舒と「天人感応」思想に向けている。彼の観点から見ると、「命、吉凶之主也。³³（時命は吉凶の源である。）」。人の行為と運命の間に関係があるとする「天人感応」の考えを否定したとわかる。即ち、人の運命を決めているのは「天」ではなくて、「命」である。

王公大臣から一般の庶民まで、皆「命」から逃げることはできない。人間の貧富貴賤は全て「命」で決まっている。人の一生は「命」の展開にすぎない。その途中には偶然によって、違った「命」の道に踏み込んでいくように感じられる時もあるが、最後は自分が属している「命」に戻る。これは「自然之道」と呼ばれる。しかし、人間はこれを認識できず、「天」の意志として考えている。

なお、「命」は「天」に変わることはないが、人間もそれを変えることはできない。これは「時命論」と「天人感応」思想の間のもう一つの相違点である。強盗をしたり、人を殺したり、このような悪行をする人は上天の罰に当たるはずであるが、逆に長寿の人が多し。一方、顔淵のような謙虚で好学な人は若いうちにあの世に行くこととなった。人の品行が人の運命を変えるわけではない。上天も人の品行による相応の運命を与えることはできない。

王充の「命」論のもう一つ重要な内容は「適偶之数」³⁵である。これは「時命論」の「時」のことである。即ち、人の既に決められた運命の中における偶然性である。「偶」あるいは「遇」と『論衡』では触れられている。これは彼

が統治者の「用人選材」に対して強烈な不満を持っていたことを表している。

2.2 班固の「天」の思想

現在一部の学者は班固は陰陽五行と祥瑞災異を信じていなかったという観点を提唱している。主に四つの論点がある。

第一は、班固は『漢書』の中で陰陽災異に関する内容に対して否定的な態度を取っていることである。

第二は、『漢書』五行誌について、班固は「是以髓仲舒，別向、歆，傳載眭孟、夏侯勝、京房、谷永、李尋之徒所陳行事，訖於王莽，舉十二世，以傳春秋，著於篇。⁴³（よって董仲舒の意をつまみとり、向・歆と区別し、また眭孟、孟、夏侯勝、京房、谷永、李尋の徒がのべたことがらを付載し、王莽の時代が終るまで十二世を挙げて、そのことを『春秋』に比え近づけ、本篇に著わした。）」という目的で五行誌を記録したわけである。これは前漢時代の災異思想の集大成といっても過言ではない。後唐の經学者劉知幾は五行誌に対して、「直引時談、竟無他述。⁴⁴（当時の言論を引用したばかりか、自分の評論もなかった。）」と批判したが、一部の学者はこれによると、班固は五行誌に当時の災異思想を引用して記録したにすぎない。史学者としては、当時の思想と言論を記録するのは当然のことであると指摘している。即ち、班固は陰陽五行の災異思想に対して、少なくとも中立の立場に立っていたとする見解である。

第三は、班固は『漢書』で反神論者を高く称賛している点である。

第四は、同時代の王充による影響が大きい点である。

班固が災異思想を信じていなかったという考えをもっている学者は、以上の四つの方面を根拠として論述を展開したが、本論文はそれに対して反論を述べたい。

まずは、上の論点三については、班固と王充は揚雄の理性思想に強く影響されている⁴⁷。班固は確かに「揚雄伝」において揚雄の品行と学識を高く称賛しているが、班固は反神学的で自然論の支持者であるとは言えないと思う。前の文章ですでに論じたが、両漢時代の思想界は統一と調和を特徴としていた。特

に儒家思想と道家思想の融和が最も普遍の現象であった。桓譚、劉向、揚雄などの思想家・哲學家がほぼ「儒道兼収」であった。その中に、前漢の大經學者である劉向の祖父劉辟強は「清靜少欲，常以書自娛，不肯仕。」⁸（静かであまり欲望がない。常に読書を楽しみ、役人になりたくない。）という態度をとり、父親の劉徳は「修黃老術…常持老子知足之計⁴⁸（黄老の思想に従った…常に『老子』の「足るを知れば常に心樂し」の考え方をもっている。）」という態度であった⁴⁹。劉向自身も『說老子』四篇を作っており、道家思想からの影響は言うまでもないであろう⁵⁰。しかしながら、劉向は「自然論」に没頭していなかった。逆に、陰陽五行と祥瑞災異を提唱し、傑出した經學者となった。また、その時代儒家思想は方士、陰陽五行、祥瑞災異などと互いに影響しあう関係であったため、その時代に祥瑞災異に影響されなかった思想家はいなかったと推測できるだろう⁵¹。

次に、論点四については、後漢時代に反神學の先驅者であった王充は、災異思想を認めなかった。これについては4.1.2に論じた。しかしながら、王充も「宣漢」、「贊漢」の支持者であり、祥瑞思想を認めていた⁵²。さらに、祥瑞思想は「天人感応」の一部であるため、王充は徹底的な反神學者とは言えないと考える。と同様に、班固も「宣漢」の積極的な推進者である。彼は劉向と劉歆父子の「漢家本系、出自唐帝」⁵³説を継いだ。さらに、古籍を考察し、根拠がある史料を用いてその説を証明して、「漢承堯運」を記述した⁵⁴。したがって、論点三の班固が祥瑞災異を信じていなかったという説は証明できないと考える。

また、論点二については、向燕南の「論匡正漢主是班固撰述『漢書』五行誌的政治目的」において詳しく分析したが、その中で劉知幾の「直引時談、竟無他述。」の批判に対して、反論を出している。向氏によると、『漢書』五行誌に班固が他人の言論を引用して災異を解釈するときには、必ずその人物の名前をつけた。以下は引用である。

昭十八年「五月壬午，宋、衛、陳、鄭災」。董仲舒以為象王室將亂，天下莫救，故災四國，言亡四方也。又宋、衛、陳、鄭之君皆荒淫於樂，不恤國政，與周室同行。（昭公十八年、「五月壬午、宋、衛、陳、鄭四国に火災があった。」董仲舒の思うよう、これは王室がまさに乱れようとしていることに象り、天下にはこれを救うものがなく、それゆえ四カ国に火災があり、四国を亡ぼすことをいうのである。また宋、衛、陳、鄭四国の君主はみな淫樂に溺れ、国政をかえりみず、周室と行を同じうしている。）

したがって、『漢書』五行誌には厳密な構成があることがわかる。しかしながら、五行誌にも引用元が不明な部分がある。向氏によると、この部分が班固個人の解釈である可能性があるという。特に紀元前 26 年から紀元前 8 年にかけての時期に、劉向と劉歆父子が災異を解説しなかったため、来源不明の解説は実は班固自分自身の解説である可能性がある。このような解釈は「五行誌」に数多くある。向氏の統計によると、全文に約 150 箇所あるが、游自勇氏の「論班固創立『漢書』五行誌的意圖」でこの数を 82 箇所と訂正している。即ち、『漢書』五行誌において班固は決して「直引時談、竟無他述。」ではない。さらに、彼の解説は前漢末期に集中し、「外戚乱権」「王莽奪政」とその時期の災異の因果関係を記述する一方、後漢の統治者がそれを戒めとして、「以正漢統」の願望を文章の中に託した。したがって、班固は祥瑞災異を信じていなかったとは言えないだろう。

論点一については、以下詳しく論じたい。王葆珪氏の「今古文経学新論」では、班固は「天人感応」に対して特別な考え方をもっていたとされる。これは同時代の他の思想家と違っている。彼は陰陽五行と祥瑞災異を「大数」と「小数」に区別した。本論文ではこの観点にしたがって、それぞれの意味を論じたいと思う。

2.2.1 「小数」について

陰陽家の特徴については、「藝文誌」に以下のようにある。

「蓋出於羲和之官，敬順昊天，歷象日月星辰，敬授民時，此其所長也。及拘

者為之，則牽於禁忌，泥於小數，舍人事而任鬼神。」

（陰陽家者流は、おそらく義和の官から出たものと思われる。つつしんで浩天に順い、日月星辰を歴象し、つつしんで民の農耕の時節をかぞえる、これがその長所である。拘泥するものがこの術をおこなえば、禁忌に牽制され、小數に拘泥し、その結果、人事を廢して何事も鬼神に任せるようなことになる。）

「小數」という言葉はここから出たものである。実は、班固は陰陽家に対する言論を司馬遷の父親である司馬談から継いだと考えている。『史記』太史公自伝による。

「嘗竊觀陰陽之術，大祥而眾忌諱，使人拘而多所畏；然其序四時之大順，不可失也…夫陰陽四時、八位、十二度、二十四節各有教令，順之者昌，逆之者不死則亡，未必然也，故曰『使人拘而多畏』。夫春生夏長，秋收冬藏，此天道之大經也，弗順則無以為天下綱紀，故曰『四時之大順，不可失也』。」

（私が以前考察したところでは、陰陽家の方術は吉凶を重視して禁忌が多く、人々の行動を束縛し畏怖させることが多い。しかし、彼らが四季の運行を秩序立てた点は、見逃されてはならない…陰陽家は四時・八位・十二度・二十四節気に、それぞれ守るべき規律があり、それに順うものは盛んになり、それに逆らうものは、死ぬかさもなければ亡びることになると考える。しかし、必ずしもそうとばかりは言えない。だから、「人々の行動を束縛し畏怖させることが多い」と言ったのである。いったい、春には万物が生じ、夏には成長し、秋には収穫し、冬には貯蔵する。これは自然の運行の普遍的規律である。この自然の規律に順応しなければ、天下の綱紀を制定するすべがない。だから、「四時の運行を秩序立てた点は見逃してはならない」と言った。）

司馬談は陰陽家の四時の法則を天下の秩序を立てる根本とみなした。そして、その運行の忌諱に対して「使人拘而多畏」と感じた。しかしながら、司馬談は

それに従わないで引き起こされた災異に対しては曖昧な態度を取っていた。学識が豊かな「太史公」さえ認識しづらいことを、一般的な庶民は分かるわけがない。その災異の裏の真義も理解できない。結局、凶をさけて吉を求める必要があるため、人々に「泥於小數，舍人事而任鬼神。」の傾向が出てくるようになる。具体的には災異を人事にこじつけることになる。これが班固が言う「小數」のことである。

2.2.2 「大数」について

「小數」の反面として、「大数」という言葉を造った。『漢書』藝文誌によると、天文は「星事杂悍，非湛密者弗能由也。夫觀景以譴形，非明王亦不能服聽也」のことであり、曆譜は「聖人知命之術也，非天下之至材，其孰與焉」のことである。世の中で「湛密」、「服聽」、「天下之至材」を同時に行えるのは「聖王」しかいない。班固は五行を論じる時に、『尚書』の五行に関する内容を引用して、「用五事以順五行」ということを強調した。そしてそれができるのは「聖王」しかいないと考えている。君主には徳がないと、五行の秩序が混乱する。また五徳が交代するとともに、王朝も変遷する。以上の二点で、班固が「天道」を探求できるのは「聖王」しかいないと考えたことが明白となった。

「聖王」は天の意志を身を持って体験し、観察しなければならない。そして、その意志を継いで庶民を統治する。その結果、国家は安定し順調に発展できる。これを「大数」と呼ぶと考えた。これが即ち、「聖王の道」である。当時の社会の「大一統」の政治的要求、「天人感応」の思想的要求により、この「聖王」は皇帝しかいない。

以上の分析から班固は決して陰陽災異それ自体に反対しているわけではなく、誰が、どのようにそれを利用するかによって、「大数」と「小數」の区別がある。また、班固がそれぞれに対して異なる態度を取っている。これが班固「天」の思想の一つの特徴である。

『漢書』には、前漢時代の陰陽災異家に一つの列伝がある。それは「眭兩夏侯京翼李伝」である。この列伝を通して、班固はこの学者たちの説をあまり否定しなかったが、彼らの方法に対して批判を展開したわけである。班固の観点

では、この学者たちには同じ誤ちがある。それは「強欲知天道（無理に天道のことを知りたい）」という態度である。子貢の言葉により、孔子自身も人性と天道を論じたくなかった（あるいは論じたこともなかった）。孔子は漢時代の今文経学者にとって、「素王」とみなした。古代賢王と同じ地位にいる人物である。即ち、経学者の桓譚は「蓋天道性命，聖人所難言也。自子貢以下，不得而聞，況後世淺儒，能通之乎⁵⁷（天道と人性は、聖人さえ理解しにくいことである。子貢以降聞いたこともなかった。君たち学識が浅い儒生が理解できるわけがないであろう。）」と言った。。

班固は、天道は聖人とされる帝王しか理解できないものだと考えている。しかしながら、君主は必ずしも「聖人」ではない。彼らも仁義礼智信の程度が異なっている。この場合は、学識のある学者が、君主が天の意志を継ぐことができるように導かなければならない。具体的には、災異を「納説時君」、君主が天道を見極められ、「天人感応」できるようにするまでである。班固の「五行志」は恐らくこれを目的としていると推測している。ここで、班固の観点には、二つの立場がある。一つは、臣下が君主を説得する時、自分の本分を自覚するということである。それを超えると、「強欲知天道」となって、「小数家」になってしまう。もう一つは、君主が無徳の場合は、説得をやめて自己を守らなければならないということである。董仲舒や京房などの学者はこの点を認識しなかったため、悲惨な結末になったと考えられる。まさに、「以不能由之臣，諫不能聽之王，此所以兩有患也。」ということである。これは班固「天」の思想のもう一つの特徴である。

2.3 班固の「時」の思想

班固と同時代の王充も「時命論」によって人間の運命を解釈する。しかしながら、史学者としての班固による「時」に対する理解は、王充には認識できない部分があった。それは個人の「時運」「時遇」以外に、歴史の発展と社会の規律の探求である。即ち、「時宜」ということであるが、具体的には、彼が「復古思想」「托古改制」に反対していることからこれがわかる。『漢書』王莽伝は多くの紙幅で王莽の政治改革について記録している。またその失敗により、「復

古思想」は実行できないことが証明されている。『漢書』食貨志に、班固は王莽のことを「莽性躁擾，不能無為，每有所興造，必欲依古得經文。（莽は性来おちつきがなく、無為でおられず、何事かを興すごとに、必ず古制によりその典拠となる経書の文を得ようとした。）」、「好空言，慕古法（空論を好み、古代の制度を羨む）」と記述している。したがって、彼の政治改革の内容はすべて古代の文献に来源がある。本節は王莽の貨幣改制を対象として、班固の「時」の思想を分析したいと思う。

以下は「莽伝」と「食貨誌」に五回登場した王莽の貨幣改制を記録したものである。この五回の改革を通して、王莽が期待している効果が現れなかった。『漢書』王莽伝と食貨誌によると、前三回の貨幣改革が引き起こした結果は「農商失業，食貨俱廢，民涕泣於市道。坐賣買田宅奴婢鑄錢抵罪者，自公卿大夫至庶人，不可稱數。（農民と商人が失業して、食糧と貨財がともに廃れ、庶民たちは街で泣いていた。田宅、奴隸を売買する、及び密かに貨幣を鑄造する犯罪行為をおかす人は、公卿大夫から庶民まで、数え切れないほどあった。）」ということであった。最後の二回の改革はある程度で効果があったが、基本的に前漢の貨幣制度に戻った。このような頻繁の制度改革が起こした結果は、「每壹易錢，民用破業，而大陷刑。（貨幣制度を変える度に、破産する人が多かった。さらに、法律に違反する人も多くあった。）」となった。

この結果になった理由について、陳紹棟氏の「試論王莽改幣」に二つの理由を挙げられている。陳氏は班固の観点をまとめて、王莽の貨幣改制の最も重要な理由は自分の「禪漢」を強固にするためであるとしている。王莽が初回の貨幣改制を実施した時は、ちょうど王莽が周公を模倣して摂政していた時にあたる。したがって、彼は「變漢制，以周錢有子母相權，於是更造大錢…又造契刀、錯刀…」という政策を実施した。その後、「禪漢」した王莽は新たな政権を強固にするため、二回目の貨幣改制を行った。今回は、「今百姓咸言皇天革漢而立新，廢劉而興王。夫『劉』之為字『卯、金、刀』也，正月剛卯，金刀之利，皆不得行…承順天心，快百姓意。」という詔令を公布した。

したがって、王莽の貨幣改制の根拠について、客観的な経済規律からではなく、「古之經典」にしたがってそれを行った。現代の考古学的な発見から王莽

時代の貨幣が数多く出土している。このことから『漢書』の記録がほぼ正しかったことを証明された。陳氏の研究によると、王莽時代の貨幣は形は先秦の貨幣制度を習って、布貨は「平首有孔」「方肩方足」であり、その形は明らかに戦国時代の「殊布当釐」、あるいは「四布」、「当釐」の布銭の形を模倣したものである。刀貨は「環首直背」、明らかに戦国時代の趙国の「邯鄲直刀銭」の形を模倣している。それによって、龜貨と貝貨は原始時期の貨幣であるため、すでに貨幣の作用を失った。

形の面から古代の貨幣をならうだけではなく、貨幣の名前も古代の典籍にあった古代の貨幣の名前と一致させている。主に儒家經典、あるいは周時代の貨幣を来源として新制度の貨幣の名称を制定した。「宝貨」の名称の来源は周の景王の時代に鑄造した大きな貨幣「宝貨」である。さらに、周時代の「子母相權」の規則にしたがって、大銭と小銭に分けている。丸い形の貨幣は全部「泉」と呼ばれた。これは周時代の貨幣の呼び方である。布貨は十品があり、「中布」から「次布」まで、数字と記号で表示している。このような表示の方法は、その来源は『左伝』に記載された「亥有六首二身」と考えられている。また、「次布」の名称の来源は『周礼』地官・廩人に記載された「紵布」である。唐時代の經学者の陸徳明の作品『音義』により、「紵、音次。本或作次」。「元龜」の名称は『詩経』魯頌・泮水の「元龜」から取ったものである。「公龜」、「侯龜」、「子龜」の来源は『礼記』王制の「王者之制：祿爵，公、侯、伯、子、男，凡五等」によるものある。

もう一つの理由はその時の貨幣思想による制限である。この思想の主旨は、貨幣の価値を政府と国家が政治権力で決められることにある。それは貨幣自身の価値があるか否か、あるいは価値の大小と関係がない。この思想は春秋戦国時代からすでに現れた。前漢では賈誼や晁錯、桑弘羊らがすべてこの思想を持っている。例えば、『漢書』食貨誌は晁錯の『論貴粟疏』を収録している。その中で晁錯は漢の文帝の上書に「夫珠玉金銀，飢不可食，寒不可衣，然而眾貴之者，以上用之故也。（真珠と宝石、金貨と銀貨はお腹が空いた時食べられなくて、寒い時も着られないものである。しかしながら、人々がそれを貴重なもの

のと考えているのは、地位が高い人々がそれを使用しているためである。)」と
いうことを述べている。即ち、彼の観点から見ると、貨幣自身は価値がないも
のであるということである。貨幣が重視されている原因は、君主と貴族たちが
それを使用していることである。この観点は漢の元帝時代に至って、貨幣を廃
止する観点になった。『漢書』王貢兩龔鮑伝により、当時貢禹は「宜罷採珠玉
金銀鑄錢之官，亡復以為幣。市井勿得販賣，除其租銖之律，租稅祿賜皆以布帛
及穀。使百姓壹歸於農，復古道便。(真珠、玉石と金銀を採集して、貨幣を鑄
造する官職を罷免すべき、再び貨幣を使用しないことである。市場での取引を
禁止する。税金、俸禄と褒美がすべて織物と穀類で用いる。庶民たちを農業に
復帰させて、古代の制度にしたがって国家と政治に有利な条件を作る。)とい
う主張を出した。また、『漢書』何武王嘉師丹伝により、漢の哀帝の時、師丹
は「會有上書言古者以龜貝為貨，今以錢易之，民以故貧，宜可改幣。(その時
ある人は上書して、古代は龜貝で貨幣として使われていた。現在は銅錢を使用
しているため、庶民たちは貧乏な生活を暮らしている。したがって、貨幣制度
を改革すべきである。)」という観点を支持した。この観点は貢禹のものと大同
小異である。これらの観点は班固の理解で「時宜」にふさわしくない考え方であ
ったが、王莽はそれをすべて継いだ。

班固は当時の農商関係や貨幣の流通に対して、特別な理解があった。これに
ついての研究も数多くある。彼は周時代から王莽時代にかけてのすべての貨幣
の歴史に非常に精通していた。「食貨誌」において彼は「時宜」のことを何度
も強調した。彼の観点によると、一つの時代にはその時代の特性がある。管仲
が貨幣について改制したことも、始皇帝が国家を統一した後、六国の貨幣も統
一したことも、すべて実際の要求による。武帝の時代に「五銖錢」を造って、
貨幣制度を簡単にしたことも時代の要求である。しかしながら、王莽はこれを
疎かにした。「時宜」と「民心」を考えずに、統一した貨幣制度をまた戦国時
代の混乱状態に戻したことは失敗に決まっている。さらに、彼は王莽の貨幣改
制を含め、すべての改制の失敗の原因を「周道既衰，而民不從」「動欲慕古，
不度時宜」と解釈した。

王莽の改制は実際の働きで「復古思想」が当時の社会と政治問題を解決できないことを証明した。班固はこれらの問題が形成された根本的な原因を特定できなかったが、一つの時代では自分の法則があることをはっきり理解している。彼の観点から見て前漢が強国になった原因は、自前の制度があったことである。それは決して「六経」からならったものではなかった⁶³。それと同様に、現在の君主も「時宜」にふさわしい制度で国を治められなければならない。しかしながら、班固がいる後漢の時代の儒者は王莽の失敗を教訓にすることはなく、以前として「復古思想」を提唱していた⁶⁴。これが彼が「王莽伝」を編纂したもう一つの理由だと考えられる。それも彼の「時宜」の思想のもっとも重要な表現である。

3、終わりに

本論文は班固の『漢書』王莽伝を中心として、王莽の生涯において重要な三つの事件を分析する上で、班固の「天人」と「時宜」についての観点を抽出した。さらに、この思想がどのような背景で形成されたのか、また彼の「天」と「時」の思想の特徴を論じた。この過程で、判明したことがもう一つある。それは班固が『漢書』を編纂したのは、単なる歴史の事実を記録するためではなく、歴史を通して、帝王を「天道」に感応できるように導くことを彼は本当の目的と考えている。「莽伝」も例外ではない。

後漢の初期、天命は再び劉家に戻ったが、前漢の弊害はまだ多く残っていた。班固は皇帝が「天道」を感悟するとともに、漢の正統性を守って外戚や王莽のような「乱臣賊子」に乱を起こす機会を与えないこと、また「時宜」と「民心」を把握して、国家を治理することを望んでいる。

さらに、自分を含めて、皇帝を補佐する臣下たちに、皇帝を正しい道に導くことを要求した。皇帝に「徳」があれば、災異五行で皇帝が「聖王の道」を感悟できるように導く。逆に、皇帝に「徳」がなければ、「不逢其時」であるため、自分を守ることが大事である。決して「強欲知天道」して、悲惨な結末にならないようにと警告した。

参考文献

- 『後漢書』班彪伝 中華書局 2001年
- 『漢書』司馬遷伝 筑摩書房 1977年
- 「班固『漢書』の編撰思想」 錢榮貴 「徐州師範大學學報」 2010年
- 『史記』五帝本紀 明治書院 1984年
- 『漢書』高帝紀 筑摩書房 1977年
- 『孟子』告子章句 中華書局 2001年
- 『漢書』元后伝 筑摩書房 1977年
- 『呂氏春秋』行論 中華書局 1993年
- 『尚書』堯典 中華書局 1990年
- 「論『王莽伝』」 沈重 李孔懷 「中国史研究」 1986年第6期
- 『漢書』平帝紀 筑摩書房 1977年
- 『周予同經学史論著選集』 上海人民出版社 1983年
- 『周禮』地官・大司徒 商務印書館 1997年
- 『周禮』夏官・職方氏 商務印書館 1997年
- 『周禮』春官・典命 商務印書館 1997年
- 『中国思想史』 錢穆 九州出版社 2012年
- 『太平御覽』 李防 中華書局 1960年
- 『春秋繁露』陰陽義 山東友誼出版社 2001年
- 『春秋繁露』為人者天 山東友誼出版社 2001年
- 「浅析董仲舒『天人感応』論」 嚴波等 『学科視野』 2003年
- 『春秋繁露』天辨在人 山東友誼出版社 2001年
- 『漢書』董仲舒伝 筑摩書房 2001年
- 『論衡』偶会 明治書院 1984年
- 『論衡』命義 明治書院 1984年
- 『論衡』命祿 明治書院 1984年
- 『論衡』逢遇 明治書院 1984年
- 『論衡』率性 明治書院 1984年
- 『論衡』効力 明治書院 1984年